

中国における『般若経』の研究講説

佐藤心岳

諸大乘經典は、西曆紀元後、主として西北インドを中心とした地域において成立したと考えられているが、その後、それらの諸大乘經典は、中国へ伝えられて漢訳され、数かぎりない人びとによって重視され信奉されてきた。ところで、それらの漢訳諸大乘經典は、中国においては実際に、いつごろ、どのような地域に伝えられて、研究され講説されて、人びとの思想信仰を育んでいったのであろうか。現在、その実情はかならずしも明らかではない。

この種の問題に関する研究は、きわめて重要であるにもかかわらず、これまで、どういうわけか研究対象の埒外に置かれていて、あまり注目されることがなかった。中国における仏教思想の流れをこれまでもよりもいっそう正確に把握し理解しようとするならば、われわれはどうしてもこのような問題を検討し究明してみなければならぬ。それゆえに、ここでは、諸大乘經典のうちでもとくに『般若経』を取り上げて、この問題について検討を加えてみようとおもう。

中国における『般若経』の研究講説

仏教の根本思想である「般若思想」すなわち「空の思想」は、中国においては仏教受容の初期においてすでに伝えられていた。すなわち、「空の思想」が説かれている『般若経』は、中国においては後漢のローカクシェーマ (Lokaksema 支婁迦讖) によって西暦一七九年に『道行般若経』(小品般若経) 十巻として初めて訳出されたが、その後、呉の支謙によって西暦二二二年から二五三年のあいだに『大明度経』(右と同本異訳) 六巻として訳出された。またこれにつづいて、この經典は、西晋のモクシャラ (Mokṣala 無叉羅、または無羅叉) によって西暦二九一年に『放光般若経』(大品般若経) 二十巻として訳出され、同じく西晋のダルマラクシャ (Dharmarakṣa 竺法護) によって西暦二八六年に『光讚経』(右と同本異訳) 十巻として訳出された。

このように、「大品」と「小品」との二種類の『般若経』が、中国においては西暦二世紀の後半から三世紀にかけて仏教受容の初期に

おいてすでに訳出されていたことが知られる。

ところで、これらの『般若経』は、中国では仏教受容の初期において、いったいどのような地域に伝えられて研究され講説されたのであろうか。そうして、それらの経典は人びとの思想信仰にどのような影響を与えたのであろうか。

中国における仏教受容の初期において『般若経』の研究講説に係のあった人物としては、朱士行、衛士度、支孝竜、康僧淵、竺道潜、竺法蘊、支遁、于法開、竺法汰、竺僧敷、および釈道安などが伝えられている。

二

朱士行は、潁川（河南省許昌県）の人で、明確な生存年時は不明であるが、魏晉時代の人である。かれは少くして出家して、仏教の宣布につとめた。かれは、つねに、仏道に入ったのは智慧をうるためであると云って、もっぱら仏典の講説に専念していたといわれている。後漢の靈帝の光和二年（一七九）に、『道行般若経』が竺朔仏によって訳出された^⑤。そうして、訳出者はそれを口伝したけれども、その内容は人びとによって十分に理解されることはなかった。それはあまりにも抄訳されすぎていたために、人びとはその意義を理解することにひじょうに困難を感じていたという^⑥。

また、朱士行は洛陽（河南省洛陽県）において『道行般若経』（小品）を講説したことがあったが、そのときに、かれはその経典にときどき意味のよく通じない箇所のあることを発見した^⑦。すなわち、この

『道行般若経』には、大乘仏教の根本思想である「空の思想」が説かれている。そうして、この経典は、仏教経典として最も重要なものであったにもかかわらず、その翻訳が不完全であったために、当時の人びとはそのほんとうの意味を納得のいくまで十分に理解することができなかつた。

この事実を深く歎いて、朱士行は、完全な『般若経』（小品）の原典を求めて、魏の甘露五年（二六〇）に雍州（甘肅省固原県）をあとにして、中央アジアのコータン（Khotan 于闐）へ向けて出発した。そこで、かれは予期したとおりに『般若経』のサンスクリット原典（小品）を手に入れることができた。その原典は九十章六十万余言から成っていたという。晋の太康三年（二八二）に、朱士行は、弟子のプールニヤダルマ（Purnadharma 不如檀、法饒）ら十人を遣わして、この原典を洛陽へ持って帰らせた。その後、元康元年（二九一）に、この原典は陳留倉垣（河南省陳留県西）の水南寺においてコータン出身の沙門モクシヤラや河南の居士竺叔蘭によって『放光般若経』二十巻として訳出された^⑧。

このようにして、朱士行がさがし求めていた『般若経』のサンスクリット原典は、中国本土へ送り届けられて訳出されたが、かれ自身はコータンに留まってそこで八十歳の生涯を終えた。

このように、『道行般若経』は、西暦二六〇年以前にすでに朱士行によって洛陽において講説されていたことが確かめられるが、その講説は竺朔仏訳の『道行般若経』にもとづいておこなわれたのであった。この『道行般若経』は、後漢の靈帝の光和二年（一七九）に訳出され

たと伝えられているから、朱士行がコータンへ向けて出発した西暦二六〇年よりも八十年ほど前にすでに洛陽に存在していたことになる。

いずれにしても、これによって、西暦二六〇年以前に、朱士行が洛陽において『道行般若経』の内容を正確に理解しようとして苦しみ悩みながら、その研究講説に情熱を燃やしていたことが知られる。

衛士度は、もともと司州汲郡(河南省汲県)の人で、貧しい生活に満足して、つねに仏教を必要として仏道の修行にはげんでいたという。

かれは在俗仏教信者であったが、晋の恵帝(二九〇〜三〇六在位)のときに『道行般若経』二巻を略出したと伝えられている。この經典は、ローカクシェーマ訳『道行般若経』の節略されたものであると考^⑩えられている。その内容は具体的にはわからないが、しかし、それは「空の思想」を人びとにわかりやすく理解させようとし節略されたものであると考えられるから、この經典の節略によって、その思想内容は、少なくとも当時の人びとによっていくらか理解されたのではなからうかとおもわれる。

ところで、『道行般若経』二巻は、衛士度によってどこで略出されたのであろうか。これについては文献のどこにも記されていないが、しかし『道行般若経』二巻は、晋の恵帝のころ首都洛陽において略出されたのではなからうかと考えられる。またこのころ、長安においてはすでに精舎が造築されて、仏典の講説や仏道の修行がおこなわれていたと伝えられているから、衛士度は長安において仏典の研究講説に従事して、そこで、この經典の略出をおこなったのではなからうかとも考えられる。いずれにしても、かれによるこの經典の略出は、洛陽

または長安を中心とした地域においておこなわれたことはまちがいないとおもわれる。

また、衛士度は、現存の文献中にみられる中国人としては最初の浄土教信者であったと考えられている。

支孝竜は、淮陽(江蘇省淮陰県西南)の人で、正確な生存年時は明らかでないが、晋時代の人である。かれはつねに『般若経』(小品)を熟読玩味して自己の必要としていたという。かれは陳留(河南省陳留県)の阮瞻や潁川(河南省許昌県)の庾凱と知音の交わりを結んで、八達、すなわち八人の達士のひとりに数えられていた。

晋の太安二年(三〇三)に、支孝竜は竺叔蘭について一度に五部の『放光般若経』を書写して、それらの校訂をおこなって定本を作製した。この『放光般若経』が竺叔蘭と無羅叉とによって訳出されたのは、晋の元康元年(二九一)のことであったから、この經典の校訂がおこなわれたのは、それが訳出されてから約十二年後のことであった。そうしてそのころ、そのサンスクリット原典は依然として豫章(浙江省竜泉県)に保存されていたと伝えられている。竺叔蘭によって『放光般若経』が訳出されたときには、支孝竜はすでに無相の境地を楽しんでいたという。それゆえに、かれはその『放光般若経』を二週間ばかりで読んで、すぐにそれを講説することができたと伝えられている。

ここでとくに注意すべきことは、支孝竜は、西暦二九一年に『放光般若経』が訳出される以前にすでに『般若経』(小品)の「空の思想」に深い関心をもって研究をつづけていたということである。かれは

『放光般若経』が訳出されるとまもなくその講説をおこなったと伝えられているが、それは、かれがこれよりも以前にすでに「空の思想」を理解することができるような、そのような素地をもっていたからであった。そのときに、かれがすでに無相の境地を楽しんでいたということは、このような事実から考えても当然のことであるといわなければならない。

ところで、支孝竜は『般若経』の研究講説をいっただこでおこなったのであろうか。かれは河南省の洛陽に近い陳留の阮瞻や潁川の庾凱と親しく交わっており、また、かれが活躍したのは主として洛陽を中心とした地域においてであったから、かれによる『般若経』の研究講説は、主としてこの地域を中心としておこなわれたと考えて大過ないであろう。そうして、かれによるこの經典の研究講説は、西暦二九〇年代から三一〇年代にかけての時期において最も盛んにおこなわれたようにおもわれる。

康僧淵は、その祖先は中央アジアの出身であるが、かれ自身は長安で生まれた。かれはその正確な生存年時は不明であるが、東晋時代の人である。かれはインド人の容貌をしていたが、ことばは中国語を話していたという。そうして、かれは『放光般若経』（大品）や『道行般若経』（小品）などを読誦したと伝えられている。東晋の成帝（三二五～三四二在位）のときに、かれは康法暢や支敏度らとともに揚子江を渡った。のち、かれは豫章山（浙江省竜泉県南）に寺を建てて、そこで、つねにサンスクリット原典の理解につとめて、そこに説かれている「空の思想」がきわめて奥深くすぐれているので、それをもつ

ばら講説したという^⑧。そうして、そこには多くの学者たちが中国各地から集まってきたと伝えられている^⑨。

このように、東晋時代に浙江省の豫章山において、康僧淵がサンスクリット原典にもとづいてもっぱら「空の思想」を講説したということは、注目すべきことである。かれは長安で生まれたので、かれが生まれながらにして中国語を話したということは当然のことであるが、その祖先は中央アジアの出身であったから、かれ自身は異国的な家庭の雰囲気なかで育って、中央アジアの諸言語に精通するとともに、サンスクリット原典に通暁していたことはまちがいないとおもわれる。それゆえに、かれがサンスクリット原典にもとづいて「空の思想」を講説したということは、当然ありうることであるといわなければならない。

竺道潜は、字を法深、俗姓を王といい、瑯琊（安徽省瑯琊）の人で、晋の丞相武昌郡公敦の弟であった。かれは晋の太康七年（二八六）に生まれ、東晋の寧康二年（三七四）に八十九歳で歿した。かれは十八歳で出家して、中州（山東省臨清県）の劉元真に師事した。かれは二十四歳になって『法華経』や『般若経』（大品）の講説をおこなった。かれはすでにその思想を深く理解して、それを巧みに説いたので、集まる聴講者はつねに五百人を数えたという^⑩。

晋の永嘉の初め（三〇七）に、竺道潜は戦乱を避けて揚子江を渡って江南におもむいた。そこで、かれは中宗元皇、肅祖明帝、丞相王茂および太尉庾元規などによって欽仰され、友人として尊敬された。そうして、これらの人が亡くなると、かれは剡山（浙江省嵊県西北）に

隠棲したが、しかし、道を求めて人びとがかれのあとを追って集まってきたので、かれはついに、そこで、三十年以上にわたって諸大乘經典や『老莊』の思想を講説したと伝えられている。

哀帝(三六一〜三六五在位)が仏教を尊重するようになると、竺道潜は建康(南京)に招かれて、宮廷において『般若経』(小品)の講説をおこなったが、その講説はひじょうに評判がよかったという。その後、かれは各地を遊歴したが、日頃の願いはとげられず、けっきょく刻の仰山(浙江省新昌県東)へ帰って、そこで仏典の研究講説に従事して生涯を終わった。

このように、竺道潜は二十四歳になって『法華経』や『般若経』の講説をおこなったと伝えられているが、かれが二十四歳のときはちょうど西暦三一〇年に相当するから、かれがそれらの諸大乘經典を講説したのは、西暦三一〇年以後のことである。そうして、西暦三一〇年といえば、かれが戦乱を避けて、揚子江を渡って、江南へ行ってからのことであるから、かれが『法華経』とともに『般若経』の講説をおこなったのは、主として江南においてであったと考えられる。

江南においては、かれは浙江省の剡山に隠棲して、そこで三十年以上にわたって、諸大乘經典や『老莊』の思想などを講説したといわれているから、かれがこの間に『般若経』の講説をおこなったことはまちがいないとおもわれる。また、かれは哀帝のときに建康に招かれて『般若経』を講説したと伝えられているから、かれによって『般若経』の思想的影響が建康を中心として江南一帯の人びとに及んだことは、疑いないと考えられる。

竺法蘊は、その出身地も生存年時も不明であるが、しかし、竺道潜とほぼ同時代に生存していたと考えられるので、晋時代(二六五〜三一六)の人である。かれは諸大乘經典のうちでもとくに『放光般若経』を最も善くしたと伝えられている。

ところで、竺法蘊はどこでこの『放光般若経』の研究講説に従事したのであろうか。この時代には、『放光般若経』の研究講説は主として洛陽を中心とした地域におこなわれていたので、かれによるこの經典の研究講説もまた、やはりこの地域におこなわれたと考えて差し支えないであろう。

支遁は字を道林といい、本姓を閔氏といい、陳留(河南省陳留県)の人、あるいは河東林慮(河南省林県)の人であるという。かれは幼にして聰明秀徹、初めて京師に至り、太原の王濛、陳郡の殷融らに重んじられた。家は世々仏に仕えていたが、かれは早く非常の理を悟って、餘杭山(江蘇省呉県西北)に隠居して『道行般若経』や『慧印三昧経』などの研究にはげんだ。かれは二十五歳で出家して、講肆に至るごとによく宗会を標した。かれはとくに王洽、劉恢、殷浩、許詢、郗超、孫綽、桓彦表、王敬仁、何次道、王文度、謝長暉、袁彦伯らと交わりを結んだが、かれらはいずれも一代の名流であった。

支遁は、かつて白馬寺において劉系之らと『莊子』の逍遙篇を談じて、その注釈書をつくった。それに対して、群儒旧学で歎服しないものはなかったという。のち、支遁は呉(江蘇省呉県)に帰って支山寺を建て、晩年に剡(浙江省嵊県)に入ろうとするときに、王羲之が会稽(浙江省紹興県)にいたが、かれはまだ支遁の名声を信じていなか

った。しかし、王羲之は支遁がそこへやって来て、たまたま『莊子』の逍遙篇について講説しているのを聞き、その才藻に驚絶し、かれを招請して靈嘉寺に住せしめた。

支遁はにわかにして剡山に入り、沃州の小嶺において寺を建てて行道し、百余の僧衆はつねにかれに従って教えを受けたという。また、ある人が、支遁に対して師のように俗を出でて、己のみを潔くするのは兼濟の道に違うのではないか、と問うたところ、支遁は『釈迦論』を著わして、これに答えたという。のち、支遁は石城山（浙江省永康県南）に移って、棲光寺を立てた。かれはその山門に冥坐して木喰澗飲し、志を無生に遊ばしめ、『安般』『四禪』の諸経および『即色遊玄論』『聖不弁知論』『道行旨帰』『学道誠』などを注釈した。

晩年に、支遁は山陰（浙江省紹興県西）に出て『維摩経』を講説したが、そのときに師自身は法師となり、許詢は都講となった。東晋の哀帝（三六一〜三六五在位）が即位すると、支遁はしきりに両使を遣わして徵請され、都に出て東安寺に止まって、『道行般若経』を講説した。かれは京師に三年滞在して、上書して剡山に帰り、のち、病が重くなったので、餘姚（浙江省餘姚県）の塢山に住し、東晋の太和元年（三六六）閏四月四日に五十三歳で亡くなった。

このように、支遁は江南の建康（南京）を中心とした地域において『道行般若経』の研究講説をおこなって、人びとの思想信仰に大きな影響を与えたことが知られる。

于法開は、その出身地は明らかではなく、またその生存年時も明確ではないが、東晋時代（三一七〜四二〇）の人である。かれは于法蘭

に師事して、『放光般若経』や『法華経』を善くし、また釈尊の時代の名医であるジーヴァカ（Jivaka 耆婆）を祖述して、医療に長じていたといわれている。かれは、升平五年（三六一）に穆帝が病気になる、その脈を視たが、回復の見込みのないことを知ってふたたび宮廷に入らなかつた。そうして、帝はにわか崩じたという。また、かれは難産に悩んでいる婦人を羊肉と針で治したという。

のち、かれは剡県の石城山に帰って、元華寺に住し、そののち白山の靈鷲寺に移った。かれはつねに支遁と即色空の義を争ったという。また、かれは弟子の法威をして支遁を論難せしめ、ついに支遁を屈服せしめたという。これによって、かれがいかに『般若経』の思想に通じていたかということがよくかがわれる。このことはまた、かれが哀帝のときに勅命によって『放光般若経』を講説したと伝えられていることによっても明らかである。かれは建康を中心とした地域において『般若経』の研究講説に従事して、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

竺法汰は、東莞（広東省東莞県）の人で、わかして道安と同学であった。その後、かれは戦乱を避けて、道安とともに新野（河南省新野県）へ行った。戦乱のなかで仏道の修行にはげむことはむずかしく、道安の見解に従って、同学の竺法汰は建康（南京）へおもむき、同じく同学の釈法和は蜀（四川省）へ行ってそれぞれ教化活動をおこなった。道安は弟子の慧遠など四百人あまりとともに襄陽（湖北省襄陽県）におもむいた。

当時、道恒という沙門がいて心無義を主張し、それが荊州（湖北省

襄陽県)において盛んにおこなわれていたが、竺法汰はこれを邪説となし、名僧を集めて、弟子の曇一をしてこれを論難せしめた。慧遠もまたこの説に従ったために、心無義は止んだという。

のち、竺法汰は建康の瓦官寺に止まって、仏典の講説に従事していたが、とくに、東晋の簡文帝(三七一―三七二在位)はかれを深く尊敬し、重ねてかれを招請して『放光般若経』を講説せしめた。開題の大会には、帝が親しく臨幸し、王侯公卿で集まらないものはなかったと伝えられている。また、開講の日、黑白觀聽して、士女群をなし、谿粟の門徒は、順次に席を駢べ、三吳一带(浙江省の呉興を中心とした地域)から千数百人の人びとが集まって来たという。

これによって、竺法汰が建康において『般若経』の講説をおこなって、人びとの思想信仰にきわめて大きな影響を与えたということがよくわかれる。そうして、かれは東晋の太元十二年(三八七)に六十八歳で亡くなった。

竺僧敷は、その氏族を明らかにすることができず、またその生存年時も明確ではないがほぼ道安と同時代の人である。かれは、仏教の諸經典に精通して、『放光般若経』と『道行般若経』を最も善くしたと伝えられている。かれは、西晋末(三一六)の乱に、江南に移住し、首都建鄴(南京)の瓦官寺に止まって、そこで盛んに仏典の講説をおこなった。建鄴在住の旧僧でかれに推服しないものはなかったという。また、当時、瓦官寺の沙門道嵩は、かれ自身すぐれた学僧であったが、道安に書を与えて、「敷公の研微秀発なる、われらの及ぶところにあらず」と述べている。これによっても、竺僧敷がいかにすぐれた

た学僧であったかということがよくわかる。

当時、竺僧敷は異学の徒によっても尊敬されていた。かれは『神無形論』を著わして、「形あればすなわち数あり。数あればすなわち尽あり。神すでに尽なし。ゆえに知る形なきを」と言って、人びとと論争したが、けっきょく、かれらによって信服された。のちに、かれは『放光般若経』や『道行般若経』などの注釈書を著わした。そうして、かれは瓦官寺において七十余歳で亡くなった。

このように、竺僧敷は、西晋末に江南に移住して、首都建鄴の瓦官寺において盛んに仏典の講説をおこなったことが知られるが、それは、かれはそこでいったいどのような仏典の講説をおこなったのであろうか。かれは諸經典のなかでも『放光般若経』と『道行般若経』を最も善くしたといわれている。そうして、かれはこれらの『般若経』の注釈書を著わしたほどであるから、かれが瓦官寺においておこなった仏典の研究講説は主として『般若経』を中心としたものであったと考えて差し支えないであろう。

道安は、俗姓を衛氏といい、常山扶柳(河北省冀県)の人で、家は世々英儒であった。かれは十二歳で出家したが、形貌がはなはだ醜陋であったために、師によって重んじられなかったという。そこで、かれは田舎で駆役せられること数年、のちに『弁意経』を闡誦し、『成具光明経』を覆誦するにおよんで、初めてその才学を認められた。かれはすでに具足戒を受け、鄴城(河南省臨漳県西)の中寺におもむいて仏図澄に師事し、ときに師の講説を覆説し、疑難を挫解した。

ついで、道安は諸方に遊学して、つぶさに経律を求め、のちに戦乱

を漢沢（山西省陽城県）に避けて、竺法済および支曇の『陰持入経』の講説を聞いた。また、かれは同学の竺法汰とともに飛竜山（湖北省麻城県北）に憩い、兼ねて僧先や道護と交わりを結んだ。ついで、かれは太行の恆山（河北省曲陽県西北）に入り、寺塔を創立して教化活動に従事した。ときに、慧遠らがやって来てかれの門に投じ、かれはまた武邑の太守盧歌のために仏典の講説をおこなった。

かれは四十五歳のときに冀部に帰って受都寺に住し、徒衆数百を領したという。東晋の永和五年（三四九）に後趙の石虎が卒し、石遵が嗣いで立つと、道安は招請を受けて華林園に入った。のち、国運が傾くにおよんで、道安は西のかた牽口山に行き、また冉閔の乱に会って王屋の女休山（河南省濟源県西）に入った。ついで、かれは陸渾（河南省高県）において山棲木食していたが、にわかには慕容俊が陸渾に逼ったので、かれは慧遠ら四百余人を率いて襄陽（湖北省襄陽県）に至った。

襄陽では、習鑿齒が道安を尋ねて、みずから「四海の習鑿齒である」と称したといい、これに答えて、道安は「弥天の釈道安である」と述べたという。これを聞いた当時の人びとは、これはまさしく名答であるといつて感心したという。しかし、ここでとくに注意すべきことは、道安が襄陽に十五年滞在して、その間に毎年つねに二回『放光般若経』を講説して、かつてそれを一度も廃止したことがなかったということである。その後、かれは長安に出て四年を過ごしたが、ここでもまたこの經典を毎年二回講説したと伝えられている。このように、かれはこの經典の講説を休止したことはなかったという。

ところが、道安は、この經典を講説するたびごとに、句が滞り首尾に隠没があるので、その都度、經典を聞いて深思し、『般若経』の翻訳者である敦煌出身のダルマラクシャヤやコータン出身のモクシャラなどに会えなかったことを恨んだという。そうして、かれは東晋の大元十年（三八五）に七十二歳で亡くなった。

四

後秦の弘始三年（四〇一）に、中央アジア出身の大乗仏教学者クマラージーヴァ（Kumarajiva 鳩摩羅什）は、国都長安にやって来て、仏典の翻訳活動に従事して、中国仏教の発展に大いに貢献したが、かれ以後に、『般若経』の研究講説は中国ではいったいどのようなかたちでおこなわれていったのであろうか。クマラージーヴァのころ、およびそれ以後に中国において『般若経』の研究講説に関係のあった人物としては、僧叡、曇影、道生、道融、慧亮、曇諦、法瑤、曇度、慧基、慧約、宝亮、智藏、法通、法令、慧勇、および道弁などが伝えられている。

僧叡は、魏郡長楽（河北省冀県）の人で、十八歳のときに出家して、僧賢法師の弟子になった。かれは二十二歳でひろく経論に通じ、泰山（山東省泰安県北）の僧朗法師の『放光般若経』の講説をきいて、師に認められた。かれは、二十四歳になると、各地を遊歴して仏典の講説をおこなったが、そのときにその講説を聞く人びとは群を成したという。かれはかねて中国にはまだ禅法が伝えられていないことを深く嘆いていたが、後秦の弘始三年（四〇一）十二月にクマラージーヴ

アが長安にやって来ると、その六日目から禪についての教えを請うた。その結果として、翌年の正月には『坐禪三昧經』が訳出された。

その後、僧叡はクマーラジーヴァの訳經に参加して、『法華經』などの諸大乘經典を訳出した。そのときに、クマーラジーヴァはダルマラクシャ訳の『法華經』の「天見人、人見天」という訳語をみて、これはあまりにも直訳にすぎるといったところ、僧叡がそれではそれを「人天交接、兩得相見」と訳したらどうかというので、それをそのまま訳語として採用したといわれている。このことばのうちに、僧叡の学識の豊かさの一面がよくうかがわれる。のちにまた『成実論』の翻訳が完成したときに、僧叡は初めてこれを講説したが、その趣意の説明よりはなかなか立派で、それはクマーラジーヴァの考えとまったく同じものであった。それで、クマーラジーヴァは「僧叡と会って經論を伝訳するならば、真に恨むところはない」といって、かれを称讃したと伝えられている。

僧叡は数多くの經序を作製したが、そのなかに「小品經序」と「小品經序」とがある。④これによって、かれが『般若經』に対していかに強い関心をもっていたかということがよくわかる。クマーラジーヴァによって後秦の弘始五年（四〇三）四月二十三日に『摩訶般若波羅蜜經』二十七卷が訳出され、また弘始十年（四〇八）二月六日に『小品般若波羅蜜經』十卷が訳出されると、僧叡は長安の仏教界において諸大乘經典とともにこれらの經典の研究講説をおこなって、人びとの思想信仰にきわめて大きな影響を与えたと考えられる。

曇影はその出身地は不明であるが、孤独を愛し貧に安んじて、もっ

ぱら學問に志していたという。かれは『正法華經』や『光讚般若經』をよく講説したが、その講説のたびごとに千数百人の人びとが集まったと伝えられている。その後、かれは関中に入ったが、そこで秦の姚興によって格別の礼遇を与えられた。クマーラジーヴァが長安へやって来たときには、曇影は早速かれのところへ行行って、かれに師事した。

クマーラジーヴァは姚興に向かって、曇影のことを、「昨日、影公に会ったが、かれはこの国の風流標望の僧である」といって褒め称えたと伝えられている。ここに曇影の僧としての人柄の一面がよくうかがわれる。かれは長安の逍遙園においてクマーラジーヴァの仏典の翻訳の仕事を助けていたが、後秦の弘始八年（四〇六）にクマーラジーヴァによって『妙法蓮華經』が訳出されると、かれはもともと西晋のダルマラクシャ訳の『正法華經』を最も重視していたので、早速、クマーラジーヴァ訳の『妙法蓮華經』の注釈をおこなって、『法華義疏』四卷を著わした。

このように、曇影はダルマラクシャ訳の『正法華經』を最も重要視して、それを研究したが、また『光讚般若經』をよく講説していたことが知られる。そうして、かれが『光讚般若經』などの講説をおこなったときには、そのたびごとに千数百人の人びとが集まって来たこと伝えられている。これによって、かれが長安を中心とした地域において『光讚般若經』を講説して、人びとの思想信仰に大きな影響を与えたことは、疑いのない事実であると考えられる。

道生は、俗姓を魏氏といい、彭城（江蘇省銅山県）の人で、竺法汰について仏教を学んで、のちにみずから竺を姓とした。かれは十五歳

のときに講座にのぼり、二十歳のころには、その名は天下に聞こえていたといわれている。最初、かれは建康（南京）の竜光寺に住し、ついで東晋の隆安年間（三九七〜四〇一）に廬山（江西省九江県）に入つて、そこに七年間にわたつて幽棲した。かれは、仏教の本質を究めることを最も重要視して、ひろく経論を求めて仏教の研究につとめた。当時、長安においてはクマラジーヴァが仏教経論の翻訳につとめていた。そのことを知つた道生は、慧叡、慧嚴および慧観などとともに長安へ行って、クマラジーヴァについて仏教を学んだ。

そうして、道生はクマラジーヴァ門下の四傑の一人に数えられるほど有名になつたが、師が亡くなると、東晋の義熙五年（四〇九）後秦の弘始十一年）に建康へ帰つて青園寺に止まり、そこで仏典の研究講説に従事した。かれは宋の武帝（四二〇〜四二二在位）に深く重んじられ、王弘、茫泰、顔延之などもまたかれに道を尋ねたといわれている。その後、かれは法顕訳の六卷『泥洹経』を読んで、闡提成仏説や頓悟説などの新学説を唱へたために、旧説を墨守する保守的な学徒の譏念に触れて、ついに建康仏教界の擯斥を受けて、宋の元嘉七年（四三〇）にふたたび廬山に入った。そうして、かれは元嘉十一年（四三四）十月に廬山の精舎において法席に端座して歿した。

道生は、長安においてクマラジーヴァの指導のもとに諸大乘經典が翻訳されたときには、その訳場に列席した。そうして、かれは諸大乘經典の注釈書とともに『般若経』（小品）の注釈書を著わしたが、それらの注釈書は世の人びとにひじょうに尊重されたと伝えられている。ところで、『般若経』の注釈書はいつごろどこで著わされたと考え

るべきであろうか。道生は西暦四〇七年に長安を去つて南へ帰つたから、かれが長安においてこの經典の注釈書を著わしたとは考えられない。それで、かれは長安においてはクマラジーヴァの指導のもとに諸大乘經典とともに『般若経』の研究をおこなつたが、かれはそこではただその研究に参加しただけであつて、西暦四〇七年に長安を去つたのちに、ゆっくりとそのときの研究成果にもとづいてその注釈書を著わしたと考えなければならぬ。

東晋の義熙三年（四〇七）に、道生は長安から建康へ帰つて、二十数年間そこで生存していたが、その間に、かれは諸大乘經典とともに『般若経』（小品）の研究講説をおこなつて、建康仏教界の人びとの思想信仰に測り知れない影響を与えたと考えられる。また、かれは晩年に三年間ほど廬山に滞在したが、それでも、かれによる『般若経』の思想的影響はかなり顕著であつたと考えられる。

道融は、汲郡林慮（河南省汲県）の人で、十二歳で出家して最初に外学を学んで、『論語』を暗誦して人びとを驚かしたという。かれは三十歳になって才解英絶し、内外の経書を究めたが、中央アジア出身の仏教学者クマラジーヴァが長安に滞在していることを聞いて、そこへ行ってかれに教えを請うた。かれは姚興の命によって逍遙園に入つて、クマラジーヴァの仏典の翻訳事業に参加した。そのときまづ、クマラジーヴァに『菩薩戒本』の訳出を懇請し、またみづから新たに訳出された諸大乘経論を講説した。

その後、道融は彭城（江蘇省銅山県）へ帰つて、もっぱら仏典の講説に従事したが、道を問う者は千有余人、門徒は三百人に及んだと伝

えられている。こうして、かれは多数の仏典の研究講説をおこなって、それぞれその仏典の注釈書を著わした。そうして、それらの注釈書はいずれも世におこなわれたと伝えられているが、そのなかに『般若経』（小品）の注釈書があった^④。

ところで、この『般若経』の注釈書はいつごろどこで書かれたのであろうか。道融は七十四歳で歿したと伝えられ、クマーラジーヴァが長安へやってきた西暦四〇一年には三十歳であったといわれているから、かれは西暦三七二年から四四五年まで生存していたことになる。そうして、もしもかれがクマーラジーヴァの歿後、すなわち西暦四〇九年以後ただちに彭城へ帰って、仏典の研究講説に従事したとするならば、かれは西暦四〇九年から四四五年にいたるまでの三十六年間でこの仏典の研究講説に従事していたことになる。それで、かれはこの間に彭城において『般若経』の注釈書を著わしたと考えて大過ないであらう。

慧亮は、俗姓を姜といい、東阿（山東省東阿県）の靖公の弟子となつたが、当時の人びとは靖公を大師とよび、慧亮を小師と呼んでいたという。のちに、慧亮は臨淄（山東省臨淄県）に仏寺を建立して、そこで『法華経』などの諸大乘經典とともに『般若経』（小品、小品）を講説した。そうして、この講説には各地から学徒が雲聚したと伝えられている。

そののち、慧亮は揚子江を渡って南へ行つて、何園寺に止まった。宋の泰始の初め（四六五）には、かれは莊嚴寺の大集会において義士を簡閲したが、このときにここに集まった僧は千人に及んだという。

そうして、かれはこの寺の法主となり、宋の元徽年間（四七三～四七七）に六十三歳で歿した。

ところで、慧亮は山東省の臨淄において『般若経』を講説したが、それはいったいいつごろのことであったのであろうか。慧亮は宋の泰始の初め（四六五）に揚子江を渡って南へ行つていたことが明らかであるから、かれが山東省の臨淄において『般若経』を講説したのは、少なくとも西暦四六五年以前であったということになる。しかしながら、西暦四六五年には、慧亮はすでに揚子江を渡って南へやって来ていたのであって、かれが実際にここへやって来たのはこれよりも以前のことであった。それで、かれが実際に山東省の臨淄において『般若経』を講説した時期は、西暦四五〇年、すなわち五世紀の半ばごろであったと考えて差し支えないであらう。

曇諦は、俗姓を康といい、先祖は康居国の人で、後漢の靈帝のときに中国へやってきて、献帝の末に戦乱に会つて呉興（浙江省呉興県）へ移つた。そうして、かれの父は冀州の別駕であった。かれは十歳で出家して、父とともに各地を遊歴して、クマーラジーヴァの弟子の僧契に会つたりしたが、晩年には、呉の虎丘山（江蘇省呉興西北）に入つた。そこで、かれは『礼』『易』『春秋』および『法華』『維摩』などの諸大乘經典とともに『般若経』（小品）の講説をおこなつた。のちに、かれは、呉興へ帰り、故章の岷崙山に入つて、そこで二十余年を過ごし、宋の元嘉の末年（四五三）に六十余歳で歿したと伝えられている。

このように、曇諦は、晩年に江蘇省呉興の近くの虎丘山に入つて、

そこで『般若経』を講説したことが知られるが、しかし、かれによるこの經典の講説は、そののち、かれが呉興へ帰って、故章の岷崙山に入ってからもおこなわれたにちがいない。それで、曇諦によるこの經典の講説は、少なくともかれが亡くなった西暦五世紀の半ばごろまでは、江蘇省の南端に位する呉興を中心とした地域においておこなわれたと考えられる。

法瑤は、俗姓を楊といい、河東（山西省永濟県）の人で、宋の元嘉年間（四二四～四五三）に揚子江を渡って、呉興（浙江省呉興県）へ行き、そこで沈演之に重んじられて、武康（浙江省武康県）の小山寺に住した。元嘉年間に、かれはこの小山寺において『涅槃』『法華』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『般若経』（小品）の研究講説をおこなった。かれは小山寺において毎年開講したが、かれの講説を聞くために、多数の学者が三呉一帯から集まってきたと伝えられている。そうしてそこで、かれは諸大乘經典の注釈書とともに『般若経』の注釈書を著わした^④。かれは宋の元徽年間（四七三～四七七）に七十六歳で歿した。

ところで、法瑤が呉興の武康の小山寺において『般若経』の研究講説をおこなったのは、いったいいつごろのことであったのであろうか。『高僧伝』巻七の法瑤伝の記述によると、法瑤は呉興の武康の小山寺に十九年間滞在して仏典の研究講説に従事していたことが知られる。そうして、かれが勅命によって首都建康に出るために呉興の武康の小山寺を去ったのは、宋の大明六年（四六二）であったから、かれが小山寺に住して仏典の講説を始めた最初の年は、これよりも十九年

前の西暦四四四年であったということになる。それで、かれが呉興の武康の小山寺において『般若経』の研究講説をおこなって、そこでその注釈書を著わしたのは、西暦四四四年から四六二年にいたるまでの十九年間のうちのいずれかの時期であったということになる。

曇度は、俗姓を蔡といい、江陵（湖北省江陵県）の人である。かれは、はじめ宋の都建康に遊学して、そこで『涅槃』『法華』『維摩』などの諸大乘經典とともに『般若経』（小品）を研究して、その深淵にして微妙な意義を探究した^⑤。のちに、かれは徐州（江蘇省銅山県）へ行って、僧淵法師について『成実論』を学んだが、これに関する深玄な知識をもっているという点では、当時、かれの右に出る者はいなかったという。

北魏の孝文帝（四七一～四九九在位）は、曇度の名声を聞いて使いを遣わしてかれを招請したが、そのときに、かれはすでに北魏の都平城（山西省大同県）にやってきて、大いに仏典の講説をおこなっていた。そこで、孝文帝は、早速みずから曇度の講席に列席して、そのすぐれた講説に耳を傾けた。このようにして、曇度は北魏の都平城において仏典の講説をつづけたが、中国各地から集まってきた学徒は千人以上にも及んだという。そうして、かれは北魏の太和十三年（四八九）に歿したと伝えられている。

ところで、曇度が宋の都建康において『般若経』の研究をおこなったのは、いつごろのことであったのであろうか。かれが宋の都建康から徐州を経て北魏の都平城へ移ったのは、北魏の孝文帝の在位中である。もしもかれが孝文帝が即位した西暦四七一年か、またはその後ま

もないころに平城を訪れたとするならば、かれが建康において『般若經』の研究をおこなっていたのは、西暦四七一年ごろまでであったということになる。しかしながら、かれは実際には平城を訪れる以前に徐州に滞在していたから、かれが建康に在住して諸大乘經典とともに『般若經』を研究していたのは、少なくとも西暦四七一年よりももう少し以前のことであったと考えなければならない。それで、それはおそらく西暦四五〇年代のことであったと考えて大過ないであろう。

それでは、曇度は、北魏の都平城にはどのくらい在住していたのであろうか。かりに曇度が孝文帝が即位した西暦四七一年に平城を訪れたとするならば、かれが歿したのは西暦四八九年であったから、かれが平城に在住したのは約十八年間であったということになる。それで、かれはこの十八年間に平城において仏典の講説を盛んにおこなったということになる。そうして、かれがそこでどのような種類の仏典を講説したかということは不明であるが、しかし、かれはかつて宋の都建康において諸大乘經典とともに『般若經』を研究した人物であったから、ここでもかれがこの經典を講説したことはまちがいないと考えられる。

慧基は、俗姓を呂といい、吳国錢塘（浙江省杭県）の人で、幼にして建康の祇洹寺の慧義法師に依り、十五歳で出家して仏典の研鑽にとめた。のちに、中央アジア出身の法師サンガヴァルマン (Saṅghavarman 僧伽跋摩、康僧鎧) が中国へやって来たときに、慧基はかれの師の慧義の命によってサンガヴァルマンに供事した。かれは二十歳のときに蔡州（河南省新蔡県）へ行って戒を受けたといわれている。

当時、宋の都建康へやってきたサンガヴァルマンは、慧基に向かって「汝はまさに道、江東（江蘇省地方）に王たるべし。すべからく久しく京邑に留まるべからず」と述べた。それで、かれは四、五年のあいだ中国各地を遊歴して、つぶさに衆師を訪ねて、『法華』『思益』『維摩』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『金剛般若經』や『般若經』（小品）の研究に没頭した。

その後、慧基は宋の都建康においてかれの師の慧義といっしょに過ごしていたが、元嘉二十一年（四四四）に師が亡くなると、東へ帰って錢塘の顕明寺に止まり、ついで会稽（浙江省紹興県）へ行って、山陰の法華寺に止まった。そうして、ここに多くの学徒が道を問うて集まって来るので、かれはまた三呉一帯を遍歴して、仏典の講説をおこなった。その講席にやってくる学徒は千人以上に及んだという。宋の太宗（四六五〜四七二在位）は使いを遣わして慧基を招請したが、かれは病氣であると称して行かなかった。元徽年間（四七三〜四七七）に、かれはふたたび招請されて、初めて浙水を渡ったが、また病氣になって引き返して、会邑の龜山に宝林精舎を建てて、そこで過ごした。当時の有名な文学者、周顒、劉瓛、張融などはみなかれの教えを受けたという。かれはすでに名声を天下に馳せ、勅命によって僧正となっていたが、斉の建武三年（四九六）十一月に城傍寺において八十五歳で歿した。

ところで、慧基が諸大乘經典とともに『般若經』（金剛、小品）の研究に従事したのは、いつごろのことであったのであろうか。慧基は二十歳で戒を受けたのち、サンガヴァルマンから江東へ行って法を説

くように勧められた。それで、かれは四、五年のあいだ各地を遊歴して、諸大乘經典とともに『般若経』の研究に従事したと伝えられている。かれは齊の建武三年（四九六）に八十五歳で亡くなったから、かれが二十歳のときはちょうど宋の元嘉九年、すなわち西暦四三二年に相当する。そうして、その後四、五年のあいだ、かれは各地を遊歴して、諸大乘經典とともに『般若経』の研究に従事したのであるから、かれがこの經典の研究に従事したのは、西暦四三二年から四三七年までの間においてであったと考えられる。

その後西暦四四四年に、慧基は、宋の都建康から東へ帰って、錢塘の顯明寺に止まり、しばらくして会稽へ行って、山陰の法華寺に止まり、三吳一带（江蘇省の南部および浙江省の北部）を遍歴して、仏典の研究講説をおこなったから、とくに『般若経』に深い関心をもっていたかれが、西暦四九六年に八十五歳で歿するまで、これらの地域の人びとにこの經典の思想的影響を与えたことは、疑いのない事実であると考えられる。

慧約は、俗姓を婁といい、東陽烏場（浙江省金華県）の人で、七歳で『孝経』や『論語』などを読んだ。かれは十二歳になって初めて刻（浙江省嵊県）に遊び、あまねく塔廟を巡拝して、多数の仏典の奥義を究めたので、当時の人びとから「少くして妙理に達した婁居士」と呼ばれていた。かれは宋の泰始四年（四六八）十七歳のときに上虞（浙江省上虞県）の東山寺において出家し、南林寺の沙門慧静に師事した。かれはまた師の慧静について刻の梵居寺において仏道の修行にげんだ。

齊の太宰文簡公楮淵や太尉文憲公王儉は、ともに熱烈な仏教信者であって、仏教の宣布に努めた人であるが、かれらの希望によって諸大乘經典が講説されるときには、やはり『維摩』『勝鬘』『法華』などの諸大乘經典とともに『般若経』（大品）が選ばれて講説された。ここには、齊の都建康を中心として一般の知識階級によって『般若経』がひじょうに尊重されて、よく研究され講説されていた事実の一端がうかがわれる。

宝亮は、俗姓を徐氏といい、その祖先は東莞（山東省莒県）の貴族で、晋が敗れたときには東萊の愷県（山東省黄県）に避難した。かれは十二歳で出家して、そのころ名声の高かった青州（山東省益都県）の道明法師に師事して、二十一歳のときに宋の都建康へ出て中興寺に止まった。かれは人びとから尊敬され、ことに熱心な仏教信者であった齊の竟陵文宣王はみずからかれのところへ行って、教えを請うてかれを接足恭礼したとさえ伝えられている。

その後、宝亮は鍾山（江蘇省江寧県）の靈味寺に移って、『涅槃』『勝鬘』『維摩』『十地』『成実』などの諸大乘經論を講説したが、そこでは『般若経』（大品、小品）は十回近く講説されたと伝えられている。かれには三千人以上の弟子があり、つねに師事する弟子は数百人に及んだという。かれは梁の天監八年（五〇九）に靈味寺において六十六歳で歿した。

ところで、宝亮が鍾山の靈味寺において『般若経』を講説したのは、いつごろのことであったのであろうか。宝亮が靈味寺に入って仏典の講説をおこなったのは、齊の竟陵文宣王に会ったのちのことであ

るから、それは齊代のことになる。かれがかりに齊の永明八年（四九〇）に靈味寺に入ったとするならば、かれが靈味寺で歿したのは梁の天監八年（五〇九）であったから、かれは靈味寺に約二十年間住していたことになる。それで、かれはこの二十年間のうちのいずれかの時期に靈味寺において『般若経』の講説をおこなったと考えて差し支えないであろう。

智蔵は、俗姓を顧氏といい、呉郡呉（江蘇省呉県）の人で、十六歳のときに宋の明帝に代わって出家した。かれは宋の泰始六年（四七〇）に勅命によって首都建康の興皇寺に住し、上定林寺の僧遠や僧祐に師事し、また天安寺の弘宗にも師事した。さらに、かれは当時すでに天下に名声を博していた僧柔と慧次の二師について仏教を学んで、それに精通したと伝えられている。齊の文憲王公は智蔵を安居に招いて、かれと早く知り合わなかったことを歎いたといわれている。

太宰文宣王は大いに仏教を興隆し、仏典を講説するために、学解の僧を二十人ほど招集したが、そのときに智蔵はそのなかに選ばれた。かれは年臘が最少のために末座にすわっていたけれども、仏教の意義をよく理解していた点では、かれの右に出る者はいなかった。齊の永元二年（五〇〇）に、智蔵は会稽へ行って、法華山に住して、そこで仏典の講説に努めたが、やがて梁代になって首都建康を中心として仏教が盛んになると、かれもそこへ出て行って仏教の弘通に尽力した。かれは『涅槃』『十地』『金光明』『成実』『百論』『阿毘曇心』などの諸大乘経論とともに『般若経』（小品、大品）の研究講説をおこなって、それぞれその注釈書を著わした。そうして、これらの注釈書

はすべて世におこなわれたという。かれは梁の普通三年（五二二）九月十日に開善寺において六十五歳で歿した。

ところで、智蔵による『般若経』の研究講説は、どこでおこなわれたのであるか。かれはその生涯の大部分を首都建康で過ごしているから、かれによるこの経典の研究講説は、主としてそこでおこなわれたと考えて大過ないであろう。ただかれは齊の永元二年（五〇〇）以前に一度と永元二年に一度と計二度ほど会稽へ行って、そこで仏典の研究講説に従事していたから、かれがそこで『般若経』の研究講説をおこなって、人びとの思想信仰に影響を与えたことは疑いなくおもわれる。

法通は、俗姓を褚氏といい、河南陽翟（河南省禹県）の人である。かれは十一歳のときに出家して、もっぱら諸大乘経典の研鑽に努めたが、その諸大乘経典のうちでも、とくに『法華経』と『般若経』（大品）を最も重要視して、その研究に力を尽くした。かれは三十歳に満たないうちに講師となり、かれの講席には学徒が雲集したと伝えられている。

その後、法通は首都建康へ出て、はじめて莊嚴寺に止まり、のちに上定林寺に住した。かれは齊の竟陵文宣王や丞相文獻王によってひじょうに尊敬された。かれは陳郡（河南省淮陽県）の謝朏、呉国（江蘇省呉県）の陸果、潯陽（江西省九江県）の張孝秀などに戒を授け、かれの僧俗の弟子は七千人以上に及んだといわれている。かれは首都建康の東北にある鍾山において約三十年間を過ごして、梁の天監十一年（五一二）九月二十一日に七十歳で歿した。

このように、法通は若いころとくに『般若経』（小品）に強い関心をもって、それを研究したと伝えられているから、かれは、かれが亡くなるまでの約三十年間を過ごした鍾山においてしばしばこの『般若経』の講説をおこなったことは疑いのない事実であるとおもわれる。

法令は、俗姓を董氏といい、その出身地は不明であるが、少くして出家して、鍾山の上定林寺に住した。かれはここでもっぱら仏典の研究に従事して、『涅槃』『法華』などの諸大乘経典とともに『般若経』（小品、小品）を善くしたといわれている。かれは梁の天監五年（五〇六）に六十九歳で歿した。そうして、かれは天監五年に亡くなるまで三十三年間鍾山を出なかつたと伝えられているから、かれによる『般若経』（小品、小品）の研究講説は、主としてこの三十三年間に鍾山においてなされたと考えられる。それはちょうど西暦四七四年から五〇六年にかけての期間であつた。

慧勇は、俗姓を桓氏といい、その祖先は譙国竜亢（安徽省懷遠県）の人で、のちに呉郡呉県（江蘇省呉県）の東郷桓里に寓居した。かれははじめ首都建康へ出て、靈曜寺の則法師に依止したが、二十歳のときに静衆寺の峰律師について『十誦律』を学んだ。当時、竜光寺の僧緯と建元寺の法龍とともに建康仏教界に名を成していたが、慧勇はかれらについて『成実論』の研鑽につとめた。かれは三十歳になると盛んに仏典の講説をおこなったが、その講席には遠くから学徒が集まつて来たといえられている。

陳の天嘉五年（五六四）に、慧勇は文帝に招かれて太極殿において、仏典の講説をおこなった。この講説には多数の人びとが集まり、この

とき以来、かれはひじょうに有名になったといわれている。かれは大禪衆寺に十八年間住して、もっぱら仏教の弘布につとめたが、陳の至徳元年（五八三）五月二十八日に六十九歳で歿した。

ところで、慧勇は、首都建康の仏教界において諸大乘経論とともに『般若経』（小品）の講説を二十回おこなつたと伝えられているが、かれはこの経典の講説をいつごろおこなつたのであろうか。かれは三十歳になると盛んに仏典の講説をおこなつたと伝えられている。そうして、かれが三十歳のときはちょうど梁の大同十年、すなわち西暦五四四年に相当するから、かれが諸大乘経論とともに『般若経』を講説したのは、これ以後のことである。それで、かれが首都建康においてこの経典を講説したのは、少なくとも西暦五四四年から、かれが亡くなった西暦五八三年にいたるまでの約三十九年間のいずれかの時期においてであつたと考えられる。ともかく、かれがこの三十九年間に首都建康において『般若経』の講説をおこなつて、人びとの思想信仰に大きな影響を与えたことは、疑いのない事実であると考えられる。

道弁は、俗姓を田氏といい、范陽（河北省涿県）の人である。かれは、北魏で偽経が盛んにおこなわれているのを嘆いて、多数の偽経を集めて、それらを焚き、人びとに仏教を正しく理解させるために、多数の仏典の注釈書を著わした。そのなかに『般若経』（金剛）の注釈書がみられる。この注釈書は西暦五世紀末に洛陽において著わされたと考えられる。そうして、この注釈書は世におこなわれたと伝えられているから、『般若経』の思想的影響がこの時代に洛陽の人びとに及んでいたことはまちがいないとおもわれる。

五

以上に検討したように、『般若経』は、仏教受容の最初期においては、河南省の西北部に位する洛陽、陝西省のやや南部に位する長安、江蘇省の南西部に位する建康、および浙江省の南西部に位する豫章山において研究され講説されて、これらの地方の人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。また、この時代を通じて、『般若経』の研究講説が最も盛んにおこなわれたところは、建康であり、ついで洛陽であった。

また、クマールラジューヴァのころ、およびそれ以後になると、『般若経』は、長安、洛陽、山東省の北部に位する臨淄、建康、江蘇省の南東部に位する虎丘山、浙江省の北部に位する呉興、および江西省の北端に位する廬山において研究され講説されて、これらの地方の人びとの思想信仰にひじょうに大きな影響を与えたとおもわれる。この時代にこれらの地方のうちで『般若経』の研究講説が最も盛んにおこなわれたのは、建康においてであり、ついで長安においてであった。

このように、クマールラジューヴァ以後になると、数多くの『般若経』の研究者が建康に在任して、諸大乘經典とともに、この經典の研究講説をおこなったので、この經典は、建康を中心とした地域において最もよく研究され講説されて、この地域一帯の人びとの思想信仰にきわめて大きな影響を及ぼしたと考えられる。いづれにしても、この時代に中国の南北において『般若経』の研究講説が盛んにおこなわれていたということは注目すべきことである。

注

- ① 『道行般若経』十巻は、『出三蔵記集』巻二に『般若道行品経』十巻として記され、後漢の光和二年（一七九）十月八日に訳出されたと伝えられている（大正蔵、五五巻、六頁中）。この『道行般若経』十巻は『大正蔵経』八巻、四二五頁下く四七八頁中に収められている。
- ② 『大明度経』は、『出三蔵記集』巻二に『明度経』四巻として記され、呉の黄武の初め（二二二）から建興年間（二五二〜三）にかけてのいずれかの時期において訳出された（大正蔵、五五巻、七頁上）と考えられるが、これは六巻として現存している。この『大明度経』六巻は『大正蔵経』八巻、四七八頁中く五一三頁中に収められている。
- ③ 『放光般若経』二十巻は、『出三蔵記集』巻二に『放光経』二十巻として記され、晋の元康元年（二九一）五月十五日に訳出されたと伝えられている（大正蔵、五五巻、七頁中）。この『放光般若経』二十巻は『大正蔵経』八巻、一頁上く一四六頁下に収められている。
- ④ 『光讚経』十巻は、『出三蔵記集』巻二に同じく『光讚経』十巻として記され、晋の太康七年（二八六）十二月二十五日に訳出されたと伝えられている（大正蔵、五五巻、七頁中）。この『光讚経』十巻は『大正蔵経』八巻、一四七頁上く二六頁中に収められている。
- ⑤ 『高僧伝』巻四、朱士行伝（大正蔵、五〇巻、三四六頁中）。この『道行般若経』の訳出についてはまた『道行経後記』に、
「光和二年十月八日、河南洛陽の孟元士、天竺菩薩竺朔仏より口授さる。時に伝言者は月支菩薩支讖なり。」
と記されている（『出三蔵記集』巻七、大正蔵、五五巻、四七頁下）。ここに見られるように、朱士行伝の竺朔仏訳というのは、すなわちローカクシェーマ（支讖）訳のことであって、別に二本があったわけではない。竺朔仏がサンスクリット原典を孟元士に口授し、それをローカクシェーマが訳出したのである。このような場合には、竺朔仏訳とされるのが普通であるが、ローカクシェーマ訳としてもなら差し支えはない（宇井

- 伯寿『釈道安研究』一二二頁)。
- ⑥ 訳人口伝、或不領、輒抄撮而過、故意義首尾、頗有格礙(『出三藏記集』卷十三、朱士行伝、大正蔵、五五卷、九七頁上)。
- ⑦ 嘗於洛陽、講小品、往往不通(『出三藏記集』卷十三、朱士行伝、大正蔵、五五卷、九七頁上)。
- ⑧ 既至于闐、果写得、正品梵書、胡本九十章、六十万余言(『出三藏記集』卷十三、朱士行伝、大正蔵、五五卷、九七頁上)。
- ⑨ 河南居士、竺叔蘭、善解方言、訳出爲放光經二十卷(『出三藏記集』卷十三、朱士行伝、大正蔵、五五卷、九七頁中)。また、これについては「放光經記」に詳しく述べられている(『出三藏記集』卷七、大正蔵、五五卷、四七頁下)。
- ⑩ 『出三藏記集』卷二(大正蔵、五五卷、一〇頁上)。ここでは、この經典は『摩訶般若波羅蜜道行經』二卷として伝えられている。
- ⑪ 『塚本善隆著作集』第四卷、中国浄土教史研究、一六頁。
- ⑫ 法祖……於長安、造築精舍、以講習爲業、白黑冥受、幾出千人(『出三藏記集』卷十五、大正蔵、五五卷、法祖法師伝、一〇七頁中)。
- ⑬ 常披味小品、以爲心要(『高僧伝』卷四、支孝竜伝、大正蔵、五〇卷、三四六頁下)。
- ⑭ 至大安二年、支孝竜、就叔蘭、一時写五部、校爲定本(『高僧伝』卷四、朱士行伝、大正蔵、五〇卷、三四六頁下)。
- ⑮ 皮牒故本、今在豫章(『高僧伝』卷四、朱士行伝、大正蔵、五〇卷、三四六頁下)。
- ⑯ 既素業無相(『高僧伝』卷四、支孝竜伝、大正蔵、五〇卷、三四六頁下)。得即披閱、旬有余日、便就開講(『高僧伝』卷四、支孝竜伝、大正蔵、五〇卷、三四六頁下)。
- ⑰ 誦放光、道行、二波若、即大小品也(『高僧伝』卷四、康僧淵伝、大正蔵、五〇卷、三四六頁下、三四七頁上)。
- ⑱ 常以、持心梵經、空理幽遠、故偏加講説(『高僧伝』卷四、康僧淵伝、大正蔵、五〇卷、三四七頁上)。
- ⑳ 尚学之徒、往還填委(『高僧伝』卷四、康僧淵伝、大正蔵、五〇卷、三四七頁上)。
- ㉑ 年二十四、講法華、大品、既蘊深解、復能善説、故觀風味道者、常教盈五百(『高僧伝』卷四、竺道潜伝、大正蔵、五〇卷、三四七頁下)。
- ㉒ 潜、優遊講席、三十余載、或暢方等、或釈老莊(『高僧伝』卷四、竺道潜伝、大正蔵、五〇卷、三四七頁下)。
- ㉓ 至哀帝、好重仏法……於御筵、開講大品、上及朝士、並稱善焉(『高僧伝』卷四、竺道潜伝、大正蔵、五〇卷、三四七頁下、三四八頁上)。
- ㉔ 尤善、放光波若(『高僧伝』卷四、竺道潜伝、大正蔵、五〇卷、三四八頁中)。
- ㉕ 早悟非常之理、隱居餘杭山、深思道行之品、委曲慧印之經(『高僧伝』卷四、支遁伝、大正蔵、五〇卷、三四八頁中)。
- ㉖ 至晋哀帝即位、頻遣西使、徵請出都、止東安寺、講道行波若(『高僧伝』卷四、支遁伝、大正蔵、五〇卷、三四八頁下、三四九頁上)。
- ㉗ 善放光及法華(『高僧伝』卷四、于法開伝、大正蔵、五〇卷、三五〇頁上)。
- ㉘ 每与支道林、争即色空義(『高僧伝』卷四、于法開伝、大正蔵、五〇卷、三五〇頁上)。
- ㉙ 開、嘗使威出都、經過山陰、支遁、正講小品、開語威言、道林講比汝至、当至某品中、示語攻難數十番云、此中旧難通、威既至郡、正值通講、果如開言、往復多番、遁遂屈(『高僧伝』卷四、于法開伝、大正蔵、五〇卷、三五〇頁上中)。
- ㉚ 至哀帝時、累被徵詔、乃出京、講放光經(『高僧伝』卷四、于法開伝、大正蔵、五〇卷、三五〇頁中)。
- ㉛ 時沙門道恒、頗有才力、常執心無義、大行荆土、汰曰、此是邪説、必須破之、乃大集名僧、令弟子曇一難之(『高僧伝』卷五、竺法汰伝、大正蔵、五〇卷、三四四頁下)。
- ㉜ 遠曰、不疾而速、杼軸何爲、座者皆笑、心無之義、於此而息(『高僧伝』卷五、竺法汰伝、大正蔵、五〇卷、三四四頁下)。

- ③③ 汰下都、止瓦官寺、晋太宗簡文皇帝、深相敬、重請講放光經（『高僧伝』卷五、竺法汰伝、大正蔵、五〇卷、三五四頁下）。
- ③④ 学通衆經、尤善放光、及道行波若（『高僧伝』卷五、竺僧敷伝、大正蔵、五〇卷、三五五頁中）。
- ③⑤ 敷公、研微秀發、非吾等所及也（『高僧伝』卷五、竺僧敷伝、大正蔵、五〇卷、三五五頁中）。
- ③⑥ 後又、善放光、道行等義疏（『高僧伝』卷五、竺僧敷伝、大正蔵、五〇卷、三五五頁中）。
- ③⑦ 安、在樊沔十五載、每歲常再、講放光波若、未嘗廢闕（『高僧伝』卷五、道安伝、大正蔵、五〇卷、三五二頁下）。昔在漢陰、十有五載、講放光經、歲常再遍（『出三蔵記集』卷八、「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」、大正蔵、五五卷、五二頁中）。
- ③⑧ 及至京師、漸四年矣、亦恒歲二、未敢墮息（『出三蔵記集』卷八、「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」、大正蔵、五五卷、五二頁上）。
- ③⑨ 然每至滯旬、首尾隱沒、釈卷深思、恨不見護公、又羅等（『出三蔵記集』卷八、「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」、大正蔵、五五卷、五二頁中）。
- ④① 著大智論、十二門論、中論等諸序、并著小品、法華、維摩、思益、自在王、禪經等序、皆伝於世（『高僧伝』卷六、僧敷伝、大正蔵、五〇卷、三六四頁中）。
- ④① 『摩訶般若波羅蜜經』二十七卷は『大正蔵経』八卷、二一七頁上〜四二四頁上に収められている。
- ④② 『小品般若波羅蜜經』十卷は『大正蔵経』八卷、五三六頁下〜五八六頁下に収められている。
- ④③ 能講正法華經、及光讚波若、每法輪一転、輒道俗千數（『高僧伝』卷六、曇影伝、大正蔵、五〇卷、三六四頁上）。
- ④④ 関中沙門僧肇、始注維摩、世咸翫味、及生更發深旨、顯暢新異、講学之匠、咸共、憲章其所述、維摩、法華、泥洹、小品、諸經義疏、世皆宝焉（『出三蔵記集』卷十五、道生法師伝、大正蔵、五五卷、一一一頁中）。初関中僧肇、始注維摩、世咸翫味、生乃更發深旨、顯暢新異、及諸經義疏、
- ④⑤ 世皆宝焉（『高僧伝』卷七、竺道生伝、大正蔵、五〇卷、三六七頁上）。
- ④⑤ 融後還彭城、常講說相統、問道至者、千有余人、依隨問徒、數盈三百：所著、法華、小品、金光明、十地、維摩等義疏、並行於世矣（『高僧伝』卷六、道融伝、大正蔵、五〇卷、三六三頁下）。
- ④⑥ 字井伯寿「釈道安研究」四八頁。
- ④⑦ 後立寺於臨淄、講法華、大小品、十地等、学徒雲聚、千里命駕（『高僧伝』卷七、慧亮伝、大正蔵、五〇卷、三三七頁中）。
- ④⑧ 晚入吳虎丘寺、講礼、易、春秋、各七遍、法華、小品、維摩、各十五遍（『高僧伝』卷七、曇諦伝、大正蔵、五〇卷、三七一頁上）。
- ④⑨ 釈法珍（瑤）元嘉中過江、吳興沈演之、特深器重、請還吳興、武康小山寺、首尾十有九年、自非祈請法事、未嘗出門、居于武康、每歲開講、三吳學者、負笈盈衢、乃著涅槃、法華、小品、勝鬘等義疏（『高僧伝』卷七、法瑤伝、大正蔵、五〇卷、三七四頁中下）。
- ④⑩ 大明六年、勅吳興郡、致礼上京、与道猷同、止新安寺（『高僧伝』卷七、法瑤伝、大正蔵、五〇卷、三七四頁下）。
- ④⑪ 後、遊学京師、備貫衆典、涅槃、法華、維摩、小品、並、探索微隱、思發言外（『高僧伝』卷八、曇度伝、大正蔵、五〇卷、三七五頁中）。
- ④⑫ 於是、四五年中、遊歷講肆、備訪衆師、善小品、法華、思益、維摩、金剛波若、勝鬘等經、皆思探玄頤、鑿劬幽疑、提章比句、麗溢終古（『高僧伝』卷八、慧基伝、大正蔵、五〇卷、三七九頁上）。
- ④⑬ 齊太宰文簡公褚淵、大尉文憲公王儉、佐命一期、功高百代、欽風味道、共弘法教、淵嘗講、淨名、勝鬘、俛亦請、開法花、小品（『統高僧伝』卷六、慧約伝、大正蔵、五〇卷、四六九頁上）。
- ④⑭ 後移、憩靈味寺、於是、統講衆經、盛于京邑、講大涅槃、凡八十四遍、成実論十四遍、勝鬘四十二遍、維摩二十遍、其大小品十遍、法華、十地、優婆塞戒、無量寿、首楞嚴、遺教、弥勒下生等、皆近十遍（『高僧伝』卷八、宝亮伝、大正蔵、五〇卷、三八一頁下）。
- ④⑮ 凡講大、小品、涅槃、般若、法華、十地、金光明、成実、百論、阿毘曇心等、各著義疏、行世（『統高僧伝』卷五、智藏伝、大正蔵、五〇卷、

四六七頁中)。

⑤6 年十一出家、遊学三藏、專精方等、大品、法華、尤所研審(『高僧伝』卷八、法通伝、大正藏、五〇卷、三八二頁七)。

⑤7 晦迹鍾阜、三十余載、坐禪誦念、礼懺精苦(『高僧伝』卷八、法通伝、大正藏、五〇卷、三八二頁中)。

⑤8 善涅槃、大、小品(『統高僧伝』卷五、法令伝、大正藏、五〇卷、四六五頁中)。

⑤9 足不下山、三十三載、葷辛不食(『統高僧伝』卷五、法令伝、大正藏、五〇卷、四六五頁下)。

⑥0 自始至終、講花嚴、方等、大集、大品、各二十遍、智論、中、百、十二門論、各三十五遍、余有法花、思益等教部、不記(『統高僧伝』卷七、慧勇伝、大正藏、五〇卷、四七八頁中下)。

⑥1 注維摩、勝鬘、金剛般若、小乘義章六卷、大乘義五十章、及申玄照等、行世(『統高僧伝』卷六、道弁伝、大正藏、五〇卷、四七一頁下)。

〔本稿は、昭和五十二、三年度仏教大学学会研究助成による研究成果の一部である。〕